桂園今二百番歌合 上

へ4
4723
1

門 へ
號 4723
卷 1

二百番和哥吟會 卷上

題

春四十首　雙三十首
秋四十首　冬三十首
恋三十首　雜三十首

左方　香川景樹
右方　宮下正岑

判者　藤原某

昭和十六年一月十一日 尼野貫英氏贈

東一番　春風春水一時来

左

氷とく池の朔のせふくかへよ春とやおこの花も咲らん

右　勝

氷ゐ〜新の山ゑ雪そてゝ〜ふすうくめと春風そふく

左　雪の風情ゑよ〜ハ待〜孫と右雪のすう〜ゑ人

まさりても待〜ん歌

二番　春風暖入簾

左　勝

玉すゝれ中〜く春のせ吹よりう外山の雪も〜ふそとゝん

一

右

朔日さゝ新もめるひ先とけてを簾ゑ深ゐる春風そ吹

左雪の姿をいひ出〜へとゝひいとるふ〜ゑ感あり右歌も

ことゝりふ〜くすうるふ〜くハ待れと左の風情よハ

一きハおくれてそ侍る

三番　雪消山色静

左　持

くふゝれハ北ゑの雪山雪消く春の花くよりふるるの北

右

見わるゝをハ雪つる孫も雪きえやよものむ〜山春めよにゝう

左右ともよゝとゝりあ〜〜のに感もありてゆゆ申れハ

勝劣のかとはきまんこうるこうや

四番　子　日

左　千世ハこゝろかゝ〳〵さ〳〵めとふ松原んのひくをひうんとそおろふ

右　勝　子日して荷ふの〳〵へけ姫こまつちよのこゝろ〳〵やいくこる

左　亥もさるるよハ待れと右亥すのこゝろ志ゝ〳〵く

待れハ勝よゝやゝ中待〳〵ん

五番　左　震

朝ふるこゝろ引こめつまゝ紅ひく〳〵うおくも春やこゝろん

右　勝　朝ふく〳〵こゝふ山のこゝる春のゝけまのと語こゝさ〳〵ん

左　こゝゝめりハゆ〳〵ふれと姫ゆのこゝる春山ゝ春やこゝろん

の地をこゝへこゝるハこゝうまくさきるゝ栖ふくゝや右亥一首

けこゝゝ作者のめけ〳〵をこゝうと亥の論こつゝ負ハ

勝こゝ

六番　左　持　霧深山氣色

右　ふとふるの亥山ふるとけものこゝもゝを仕亥こゝふひく

常人にも姿こと変る言葉の山ふかひく春霞の風
ふるの音山ぬ霞いと高くしくしを言葉は霞又
あうぬ人地をれいつまおとれりとも定めうこ

七番　海上震

左

あくくこそたんとおもひ　笘篠の波まに霞む松の影立

右勝

春うれと霞はうこの名も高く千へ波うけてさおひよう
左　風情いとおくしく侍るものの霞の論今すこし
うしくも侍らん歟　右　霞おのこの論つよく風情
もおくしく侍れ勝とやゆらん

八番　鶯　剔

左

わう園よりそおうぬ日ハ鶯の声あまたを拝をきうぬ日ハ陰し

右勝

鶯門のひもの行よ鶯の声やをめつらん鶯おく昭
左　鶯の声ハ　おうぬ日ハといひしもさのをおとを
ちくくも侍ぬを三のるよ鶯られれハ行とふく
耳立て頃あうぬん地は右　一あ　有くちく人
もおのつうよ侍れハ勝とは

九番　水鶏

左　持

鳥

河上の浅志のかれ葉なとかりに帰鶯や氷とくらん

右

かつら川棹さしくれハ名の上の梅さく里に鶯そなく

左哥いとよろしく右哥も又風情ありけれく
侍れハ持とや申侍らん

十番　暁鶯

左

夜をこめてなく鶯ハ里のやとの竹の葉しけみやとりかるらん

右　勝

鶯の声たえつゝけるに声すなり森しけれ竹のよやねかなん

左哥もあしくはあらし稀と右哥なのつゝしなる蔵

ありてなと侍しハ勝とや申侍らん

十一番　水辺若菜

左

川岸よも雪わかれハ青柳のゝなかれとひとつなりけり

右　勝

春もやなき浅沢見のわかれ若菜ハこゝろあまれを藻てそつむ

左哥なれの情さらになし小草とゝいひても見むへし
又青柳も冷なし右哥さして詠き詮とハ侍らね無
難なけれハ勝とに

十二番　春雪

左

春のはつかに見れば雪あり高砂の松はいまだ深雪なる

右　勝

梓弓春の山道よりゆる雪はおしなべて花を待やまんとす

左　雪ことゆりはつかに残りて右雪ふるへうるはしく感もあるを雪のこれはいまだ

十三番　残雪

左　持

かけろふの立ちまる春日よりおのづから消ぬかりけり雪のきえ

右

春来るとまだひく雪よりはるる時はいとものとけまはるを有る

左右ともにおなじかりやはたらん

十四番　餘寒

左　持

梅にうぐひす春とおもふる鶯のゆくへもしらぬ雪はなほ

右

さえこそまさりなる雪ふりぬる時なるを今はさらに時をしらん

左右ともにおなじかりやはたらん

十五番　梅

左

庭の梅はさきそめにけりあらしふく風はいまだ寒しかな

右勝

色も香もあうたるもあるを百をくらべて梅にうつるへうるる

左 ことのうつりハ梅に付れと蔵白おのつゝふるぬ花

しを再三付るの付の右ハ十首ふるれハ

勝よやゝ付るん

十六番　月前梅

左

やゝ月もあやふよりハ梅の花ゑるく月よりふゝ

右勝

梅うゑる花の下窓月清しおんさく狂もよりさすうゝん

左 風情いとふるくやゝ右ハことゆりあるゝうゑ風

情もおうしく付れハ勝ゝ

十七番　山家梅

左

あゝしはし吹とゝ山里ハ梅の白ひゝもゝりゝるゝ

右勝

梅の花ひゝ深山のさゝ丈に雪をゝ絲つゝゝゝ人も

左 ゝもさゝるゝゝハ付れと右ハ論すゝゝまゝゝても

付るへし

十八番　梅香留袖

左

うゝんのゝゝゝゝゝる梅の花あやゝしく袖の白ひゝゝ

右勝

梅のえだにめてしらるるかをそなつかしみ

左　初二のるうまくこるてりとも雪のしたに風情う

すくや　右　雪こそめりの吟にきくうるうく侍れい

勝と

十九番　故々柳

左

かつりまてとけやもとよりなる成ろう結ひ玉つる青柳の糸

右　勝

蕉とふ春すゑれハふるゑのふるゑ柳もこのしまうう

左　雪行のふのよのと結ひ玉て今又何のるあふとのしと

するるやさくにそのん得うう　えうりまそをハう

まてハ古々の吟もえるるや一首平懐まして安んぬ

とやいうし右雪こそふりうるうて去くるもおのつつ感有

てはし侍れいまさ〜丈勝と

二十番　遠村柳

左

ふりるるるるふりも青柳のふひく方とふひく春のか

右　勝

村まるる幸山里のむ〜柳それも々ありて色とそそる

左　雪の結るふひく春のふとハ口拍まそいるんに

ておのつつるるや右雪のうれるふおく安安も

いや〜うるに侍れいまさ〜丈勝と

二十一番　春草短

左　道のへるのふしくにおつれたる春をもとめそるらん

右　勝　もえにくり篝ふ萩ふ時白くふ庭の垣ひまる春草

左　寄すくうるふしくに侍るめるうつの白代ちくへ

いくに侍らん春をもとめるとつくくもくるるしうぬさ

やすらふ中のぬ紅つのひともおりひ侍るに俗るに

もや右寄雑ふくことわりるしうる侍れ勝とた

二十二番　蕨未遍

左

こしはすすまつ下ふをさえくまるりえいてた春のさるるひ

右　猶

うるあるてるれ生れの初るひるれふそせふりてまやしる

左寄いるるいしくふれれ生れとくくるるあ侍れを

をまこすはるるるたも春ふんち　する右寄詮お

しく侍れ勝やや侍るん

二十三番　春夕月

左

あするも春の日影のちくれふくるもまるて月ふ光ふ

右　勝

弓もりて寄るたむ夕けやおろて月の始ふるん

左 雲日の光うれいなくてくるを待兼て月の光遠く出るを
絶えはてぬれいなそ月の光遠く出るをいふそれなる
あるめをいふ雲あてくる風情をまれ待るもさ
る春月の情ふし者無詮いとおろかれい勝よれ

十四番 俳 一ノ巻

左

はるくと霞める雲をおもひ出ぬ世をふる人ぞ

右 勝

人ふるぬ世を年ぬ一ノのこれも又やうれいをしよ世を経者れ
左 雲さやる詮なるも待るを右一ノををりる情
感まさるるもやはらん

二十五番 俳 一ノ歩

左

花ようるまく待る人ぞ今ハとてをハおりひ人ぞ

右 勝

春のゝ大方立くくへりうんひ人ぞ春のともしよ
左 雲ともうふるこのにはれと右雲ふけまこのひ
やうに待てハ勝よやはらん

二十六番 春 鳥

左

やし薹あのる聲ハよ鶯子も声立つ子中恵こふるのふるゝ

右 勝

いろもれい春はすこゝをゆくるこの孫くるつもの数も
左　ゆくるこのうつぼすて感ふよ八代孫と右ゆ落ノ西
ゆくへをいれい風雅すこ一場ゆくるもの代ゆん

二十七番　桜

左　持

今年もやみゆそこにあくのまつこさくとゆる山さくらゆる
右

春の日はふのよを時とさく花のちまつ妹一き山さくら式
左右ともに風情よろしく感ありて共に代れ勝
かふきりのふくしく

二十八番　林中桜

左

常ゆれくゆ未すりの板東ゆるさくれてやゆ
右　勝

花ふりれ桜ゆくもゆくさりし林のうへよりくまつ
たくゆ未まりれ作奈いまさんゆうゆ志そまくうまく
いひのふへくるるてよもゆすれ右ゆ一山ゆくく風
情ゆくれ勝ゆやゆ代ゆん

二十九番　山寺花遅

左

あくこに寺くゆれ八さくれの高根の雪八さくゆくま

右勝

あ[illegible]川の嵐めいまさ[illegible]れハさうんともまぬ山さと[illegible]この[illegible]

左ハもさ[illegible]人文風情ハ侍れと右ハすさ[illegible]まさりても

侍るへし

三十番　霧籠花

左　持

[illegible]うもそ[illegible]人よりのをまさ[illegible]霧[illegible]れ川よりよ花のさと[illegible]

右

山さと[illegible]さのり[illegible]れく春霞色めちくさい[illegible]川よりう

左右ともにことわりのよ風情ハおろ[illegible]く侍れハ持や

侍らん

三十一番　曙山花

左

[illegible]のくとろ[illegible]川あるる[illegible]のよにあ[illegible]れ神る山さと[illegible]の[illegible]

右　勝

[illegible]きの神ハ[illegible]ふめ[illegible]れ[illegible]よ山さと[illegible]れ

左ハ[illegible]をと[illegible]る[illegible]のとさを[illegible]ふ[illegible]右ハ一代

あ[illegible]ふ[illegible]感も侍ハ勝[illegible]

三十二番　故園花自發

左　持

いと[illegible]へハ左ハ人よまれ[illegible]もさよ[illegible]れの[illegible]の花園

右

待をり人いふられとおのつから今も咲ける花園
左右ともとゝやりゆゝしくとゝけもあるべきや　十作こん

三十三番　花　丈　松

左
名所あるあゝしれ山をたゝるせハ花こそ松の盛ふりゆれ
右　勝
松さく嵐の山をたゝるせハ松をのこしてうるさくをも
左　花ゆえ初るふるけの命ハ下のる花こそ松の
さうとハ余りつゝるこんやうれ初つるひこそ
いとゝつゝハしやゝ右ゆきこよ雑ふられハまき
さ勝とハ

十二

三十四番　花有冥落

左
とふ人もまよ山のゝのさゝ花独咲てハ猶ちるこん
右　勝
いのあれハひつ林のさゝ花こゝくよ咲てちるこん
左ゆきこにのふハやゝ題ハ今咲もあるハとや蕾も有
とゝふ人ゝそ逢来のるゝされハひり咲てひりちるふ
ていのふハ山ゆのちゝ人とふ人の有花ハくよさのせく
もひちゝてりちゝとふのりゝやうに咲の中右ゆきと
ゆりゆゝこんちゝ人もまゝこに付れハ勝こん

三十五番　水上落花

左

地あの色ようろふ新のようちてさきある山さくらゑ

右　勝

かくり舟棹さし袖よちる雪ハひらめるねのさくらゑ

左歌初んゆきみていとちうくちくや右歌ことわりつよく姿

もおもきよ行れハまさりき勝よし

三十六番　残花歌

左

一さうり育ての後ハよの中よのうるハ花もすくれうゑ

右　勝

山さくら峯居よ雪ハあまと見て花も一木二木よ来よろゑ

十三

左歌あまり詮ゑをいとれるりの右歌

さくりつよく一ゑ有てすて行れハまさ

勝よし

三十七番　款冬

左　持

ふゝんの井よれ玉水くまて新まてうる山吹の花

右

ゑ門の里よ雨のうハちゑれもさくとうる山吹の花

左歌姿いと雨ゝにくゝ新まてうるとうか

よゝて右歌又風情うるハくゝてともに成行ハ

勝劣を知のゝ

三十八番　川款冬

左　持

[illegible]清澄川の澄つきて春くれぬる山吹の花

右

よ[illegible]川[illegible]河風[illegible]ふるも春おいそへて山吹のそれ

左　右ともに[illegible]風情おのづからに付れたれ

おもかげ[illegible]

三十九番　雨夜思花

左　持

よもすがら[illegible]松の[illegible]ひまもちらでやすらん花ぶさ

右

あ[illegible]ぶさ[illegible]春日[illegible]

左　右ともに[illegible]風情[illegible]

おくゆかしく付れ

四十番　暮春

左　持

花[illegible]

右

いつ[illegible]花のこゝ[illegible]衣[illegible]

左　[illegible]風情[illegible]

春[illegible]

行[illegible]

四十一番　春後興花

左　梢とも青もの〻けよりうめれと花の雪をいと霜ふし

右　勝　春ふかくけるとハへれとも春ひさしぬ花のとうふ

花の雪もことわりなりてあとハあ〻〇と右の雪

伺とものくさ〻ハ風雅感伝れハ勝とハ

四十二番　卯花隠路

左　持　卯の花の家ふむ小路の山の〻ハ波よめれ卯花そえん

右

白〻人のうつ家の家の中つ道花ゝる卯とよふ〻ゝ〻の人〻ゝり

た右ともにおゝしき風情よて勝劣ふくや伝ゝん

四十三番　郭公

左

ん〻ゝ〻ゝ山出ても卯ゝ〻ゝ世をゝの花吐伝ゝ吸ゝん

右　勝

笑ハ又ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝんとゝ〻ゝ〻ゝれてん〻ゝ吐ほ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

た雪すしめよハあ〻〇とゝ〻ゝを詮とゝ〻ゝるれ〻ゝ

ん地ハ右雪ゝ〻ゝけハ笑ゝと〻ゝ〻ゝ情ゝとゝ〻ゝ

ふすし伝れハ勝とや中伝ゝん

四十四番　待郭　乙

左　時雨するさのこはいとえぬものまろよ国の板戸を叩て待てのふ

右　勝　待るるを山のくれの雨ふりていつゝまふらん

左　雨ふる一日ふりせことわりよして盛すくまふりもふ待や

右　雨ことわりおくくおのつゝふる盛も待れハ勝よ

四十五番　子女待財島

左　持　妹とまれとふるりぶんの二ふをわるくもをーむ時雨哉

右　十六

妹子とふるり待をんぶく二ふもをぬれくまふれ

左右ともふるりうてうて勝ふるへー

四十六番　関郭　乙

左　持　笑りりの打ぬるひまたふるふん志のひくまる郭ろうる

右　あふさのの笑ぬ枕むるくとおのりてる時ろう郭

左右ともに志ぬるうに志て勝ふるや

四十七番　社刄郭　乙

左　持

あし曳の山田の原のかくれなき初声ハ神そきくらん

右

時鳥こゑもまれなる石上ふるの神松なにしのふらん

左歌ハ首よくいひよろし右歌石上よのゝふるしられ

よも論ハあるまじく侍れハ勝方ふくや侍らん

四十八番　郭公稀

左

初音を一声なきていつかたの山ほとゝきすつゐにもきかぬ

右　勝

さつきまつこの二度まつほとのよをへてこゝろしくなれる時鳥哉

左歌結句もきゝなれてあまり事を上よ声有く

高雲よなるゝ由意よ云侍もきゝといひ乍放心一首儀よ

つくり出さるゝのかして時鳥よハ不意似るとも又

一右歌上のるいとよくよせられて尤よ声も

よくおもしく侍れハまさしよ勝とすそ

中侍わ

四十九番　沢菖蒲

左

住よしの浅沢ぬまのあやめ草松とくらへるねさし成らん

右　勝

夏まこともしけるゝ沢へのあやめくさそれとはかふをおもふまて

左歌松とゐハきるねさしゆめゐするよをまして

あやめよハふ本意のなちにし右歌無難なれハ勝とも

中なるへし

五十番　左持　盧橘薫袖

五ものふつりし香に匂ふよハ我袖なからぬれもすれ

右

五もれの花のかをりしるきの袖をと人とはしや人ハおもちん

左歌ことわりおのつからましてよろし　右歌一具とのへてことかりもさしかるれハ勝者なきのふし

五十一番　五月雨

左

住人の袖もひつまくちまなの葉の唐にさこえれのまわ

右　勝

五月雨の軒にえ糸みつちつ又あまりなくも浮日に式

左歌こよりハ実事めのつし論いとく袖ぬくり

右歌おのつから情よして詞つよもいとおかし

されハ勝とん

五十二番　五月雨欲晴

左

さこれの雲またこ書夜山ハやてもそらのことりなるか

右　勝

さこされも今ふやちりこかのもれ水枝の雫落やこゆり

左 ちはやぶるかみのいがきにまがふまでやはらん右 ちはやぶるかみのいがきにまがふまでやはらん

とりるの情こゝろ深れハ勝とす

五十三番 友 山

左 ふるさとをよそにうつりてかくれぬる月日のまゝを出るうゝのこゝろ山

右 勝 よそにうつりてかくれぬる月日のまゝを出るうゝのこゝろ山

左 ふるさとゆりハふるゝ成ども雪の景ハ白雪

詮こゝろをおのづから成る風情も侍れハ勝とす

五十四番 友 雲

左 たゝのこゝろよりおひくゝ雲のまゝ成ぬ友と成て行るこの那

右 勝 夕されハ立るさゝ成て友山の景ハ雲もおりゐたゝれ

左 雲ハ花よりひ白雲の友とおりてまゝ成ぬと

いふ意欲さゝハ初り山のもれおとあゝまれ〳〵まんぞ

たゝのこゝろハ花の緑よハうゝとゝ〳〵右 雲の景の

詮おりゐひ成ぬ人られて感侍れハ勝とす

五十五番 友 衣

左 ちはやぶるかみの友の衣やぶるゝ人のこゝろハうゝもてそ

右勝

むつまじく名さへまさりぬる色のうたたき織の薄けぬ羽衣

左 詮なくめるさんちゝをおのつゝふるぶやく

右 初つゝ東にいとおりく感情有て宜

けれ八まさりよ勝と

五十六番 夜 夕 夜

左

夜毒のくちあんとるとの夕の新ぶまたゆるふ新

右勝

夜のよふをせめまくるとの夕のまくゝ君をゆそたふ

左 新ふまとゆるとハたゝふのんぶやすゝる

やはくゝまとしたされハ一首のとゝかりさゝにふつゝる

右 まくゝまくゝやとさゝうよひふへく紅の情

ねのつゝ感けれ八勝と

五十七番 山家夜月

左

夜ふうゝまくゝれおゝ山里の月のひうハふくゝあうくう

右 勝

部菴ハ山の巻うくゝるくれハ夜もよさ堂の月をゝそゝれ

左 詮一まゝうけ詮ゝてさゝ感ふくや右ゝを

ゆりつくゝしておのつゝ感もけれ八まさゝ勝と

五十八番　風前夜草

左

風ふけハ秋よりさきの声すなり夜のすゑよわるもつらく

右　勝

んをよ庭の夜草さくものさゆりう家をたゝみのこのを

左歌ハ　もうゝて実ハ寄しぬるハあゝ秋と秋よ行る

の紅今すゝんゝ寄るたや右歌実情ふ捨あさ

らゝくんをゝねとゝてゝまれるあれハまきゝよ

勝とた

五十九番　涼　夜蛍

左

さゝあけて寄る蛍の新しれハ今と声もゝそつへよふ

右　勝

小夜ふくく蛍よりくあうにゝりうえよりてや寄るれん

左蛍れ声とゝてんゝ寄ゝ例をまゝたいとあやし

右歌ことゝりさゝてふれハ勝とた

六十番　洞庭蛍

左

ふる白よとゝ八滝く谷ね山り寄ハ谷の蛍ありうり

右　勝

五月山夕らえゝれハ谷水のくゝ川まよ蛍とあり

左歌三の白五月山ゝもすむへゝ蛍の寄を白く蛍

ゝハ不お寄のんちた右歌捨ゝゝて実情ふ

是ハ勝ト云

六十一番　蛍照水草

左

ふるさとのおもかげうつる山沢にかくれてみゆる蛍の光

右勝

あやまちもなき蛍の光り水の川原の草にまとうて

左　山沢にかくれてみゆる蛍の光ハ草のかげハ重へられ

水のおもかげいとおかしくもかるをうくれの紅さく人

られて上下ハあれぬるもちろん山沢流れ沢へあまた

おとあるハ無雑なるへきをあるゝ如き底つけるかち

しそいとおかしくられも例の口拍子そいとる故右ハ

実情ようて下のうもあるゝ〻れハ勝とす

六十二番　夕立

左

夕立ハあるゝの雲ようりかう清るを川を今ようるし

右勝

鶴の毛羽のゝハ雲まりて都ようを夕ゝ時

左　むらゝゝるをあれるを俗ゝ右ハ俗あるゝ

〻〻ひ有て雲まれハ勝と十へし

六十三番　夕立早

左

あまりうも夕立雲はれやらぬ面のあとにのこりさうろ

右　勝

夕立はまや雲山よりすきに名り形のさつくも落やまぬまに

左　ようこそうろうろうろうに風情もうるくゝ侍れと右ハ夕

立のあまり詮一きハ勢ひありて侍れハ勝とやゝ侍ん

六十四番　団中扇

左

今ハとて打おくぬやの扇うれぬるまや秋のうれ忘るゝん

右　勝

妹ふゝぬ国のあふきも秋色のうるぬまうハむつまゝ紫

左　ようこそありうろうにハいとれ侍れと右ハ一首の五

あハといとおゝくいひうろれて志うも感侍れハ

勝とて

六十五番　避暑

左

うつをうのいせハうり此暑にのうれ暑てもおくうろうの此

右　勝

かをふうゝ青これ月の山しゝ世ゝおゝ友とうのむうろ

左　ようこ暑の意此こつうゝく学て題の詮いとうハき侍

ハ右ハ上の白此初つひいとうんしまた又下のるの

うけいと感ありて侍れハまきゝ勝とて

六十六番　納涼

左

山うゝの岩井のしみくくて題目無くあらに成るゝ

右　勝

山しみふうれてそこに虎ともむすはまたまつ丈松のうけうれ

いつゝひ姿くくしくもうるハ丈感情有よつゝく

よくくおゝくしそこ是ハ左ハくらくて題目無丈あるゝ

花鳥無ある紙の上に成おりゝ丈風情く春ハ丈打きく

耳よハさゝまそおりゝろまやうにハすし付ゝ絵と彩度

けまる毎よいやまゝ感出くるんちゝて余情付るハ紙を

うねとまたんをゝとゝてゝあるあるくゝされハ

右の勝をとゝそ勝ゝハ中付ゝめ

六十七番　川辺納涼

左

川上の紀ゝりの新をよゝ涼ゝてをゝんよのふけぬまに

右　勝

紀川ゝそゝよゝあゝて名されハあつさゝゝくくよゝぬくくそあき

左勝員の納涼あゝハ信のよゝをもゝの心へ名れと

こハ涼ゝゝく信のよゝ紀をゝのまんすいゝて世ゝあゝ

多くくの勝よハふ吟味ゝもいあくくゝ右勝中自あく

付れハ勝ゝに

六十八番　江上納涼

左

よる波の玉江の月はすとしたにうつるとも結ぶこも枯の風

右　勝

仲つ風松吹らんく住の江のうら凉しくもよるなるかな

左　あいとよんしき風情ふれともうつるとも結ぶふと

鶯ふるこもりてのされるふれハ右ようすこ和れ

てもはくしん紋右ハ哀ハうさる和ふくさふる風情ふれ

ともはくふく高くしくのひやうふる感ようてはれハ

勝と申へし

六十九番　松高風有一声　秋

左

秋岩の松ふうをハ大そこ風を秋とも語うさるふん

右　勝

高砂の松ふく風のこゑまけハ今も秋ふるこゑすれ

左　哀の哀ふるを秋ふるをもそるさまの哀て

まく和つ文ふ哀ハしそとわりまくハしや

右　哀ようとゆうふれハ鶯よやはるん

七十番　六月祓

左

夏川の淵ハまるふるうこをもふれまくふ語のこゑん

右　勝

和ふるまくふこふ月の御祓川さそこもすこし水の白波

左の哀もとゆりはるこはるものうこ右哀一首の

ふて行ふくまうまて哀くふくはれハ勝と風

七十一番　初秋露

左

汀器のあしらの系より秋らくさうとおとるあり式

右勝

五文字秋よりさちハ弱くれとも草よりの露そおもてをきらる

左まらとりつくりつくりて感もはれと右まらとに

とりつくりあくまうらくえもいはれぬ感情

はれハまさしく文勝とて

七十二番　七夕遠朔

左持

一年をまちん別ハ朔くん花のうらもあらむなさうあ

右

夫の河のまくらのふくさ直うりなさハきのふそ遠からなる

左ともよりとわりのつくる風情おくくはれハ

いつもおくるへくもあるし

七十三番　曉　萩風

左持

かよりあれハ学んあんとるの方は夢のあふく萩のうハを

右

ふるハふけのねてよりくのあれ　老の春うんの萩のうハ色

左ともよりくれるあくあのうけもなひ

くや　はらん

七十四番　萩

左　持

一よろづやくもふまさつめけりつるんへ今秋しも萩の錦おるぞ

右

すのるおく時への萩原々ふまれ錦おりこのく盛えるう

左　右ともに一点いたりて勝劣を知らず

七十五番　三月

左

紅の淺きの時への志のすゑ分ゑ出られといまさこそ見すす

右　勝

秋つゝふかきのすゑ和を花へよう秋や侘しうまし

左　おりをのへるけさせる袷ふくや右方

一ふり有くいのあれハ勝よし

七十六番　三月　随風

左

一ゝるたに吹ひゑそれひく花すゑ風ふく時をこそ見さうる

右　勝

花すゑ袖の夕香およもあへこそれく風よりけふひとしる

左　おりをのへるさせる袷ふくや右もさせる成ハ光

まとといとおゝ風情侍れハ勝よりやゝ侍らん

七十七番　竹　蓮

左

かくハうりぶそやくんハうるくん歟人の苅萱うり秋のたに

右 勝

うのおすゝ歟くハあしよかるゝやの行そハ露のまくれまれる

左 哥かつるやけんをおりひやうるもさうるくくハ行れと

右 哥另のとよりくくる情すゝ感有さまれハ 勝とやゝ行れん

七十八番 槿 花

左

露ゝくに打ゝけやまゝ朝顔の花けもふく秋の初せ

右 勝

あるゝるハ花のあくひとおりくくもあまりとうれ朝顔のゝや

左 知すゝるうるうゝ丈感あり右哥ゝ花の情ゝくひふく

てゝくくもうるゝくくれハ感情すゝ埒てもまて行

れハ勝とやゝ行れん

七十九番 庵 露

左

まゝゝるもおくくん露をすゝひまゝ埒る庵のゝすゝ

右 勝

まゝ柳ゝ春ハあれとゝ露のゝてゝうゝ庵の秋くさ

左 哥もさるゝくハ行れと論ハ右哥すゝ埒て

行るゝ

八十番 枕上夢 虫

左 持

蓋むし〜繁り〜迄ふれハ土てゆきくれとなくなん

右

きりぎりすハ枕とひとる者すゑ素よ宿さるとなくれとなんとか

左 ふの一ふ者く感仕り右ず一点あるて感仕れハ

勝方をきりぎりす

八十一番 叢 虫

左 持

さ山田のかやけすゝさの一むらあつめてもまく虫ハ千点哉

右

秋の花茅むし〜毎ゑ声ハふるるやらくもハ花さるるのあまも

左右とも上ゑ中ゑ感おち 右ゑ中ゑ仕る

八十二番 鈴 虫

左

ひゆもふ〜くれの面ゑすゝ虫ハふるふるされくよる声ハ

右 勝

ふるふるくゆふ〜さんとおそ〜雌への鈴虫ハふるふる

左ゑ暮秋の虫ふとの髪ふ〜ハさもあるへゑをふる鈴虫

とハふる花影ゑ附面を借一出るはまこ〜くちをしゑ

ふちハ右ゑ上ゑ中ゑ感おちく仕れハ勝とん

八十三番 秋田風

左

おもしろき哉時雨の荷河の舟田の原は秋色をふく

右勝

時分猫の花さく五百代の八百田の神風ふくもふけ

左歌風雅はいとよろしけれども歌は昔より有ふれ

たる右歌ずいぶん一首の詮意作者の心ばせ

しく対句猫の形容をんつるひしる実情

感あれば勝よやはらん

八十四番　故山秋夕

左

いろふかんあまさ但一首たゞ高くうつる秋の夕くれ

右勝

かりそめてうるさにの形　古宮の昔ゆかる秋の中ふくれ

左歌そもそも古宮へ入るとは秋ゆかるひやうる

のこさをる詮ふくや右歌古宮へ入りて昔ゆかる

さま長ある感も仕れ勝よれ

八十五番　田家秋夕

左

山ーたのあぜ田の里は夕くれをぬくしもや秋ふかよ

右　勝

を麻ふく山のふもと田まのうちもゆる秋の中ふくれ

左歌あぜ田の里の夕くれをぬくしもや秋ふかよ

大きなる風情まで感ぜられ右とあらぬ感情も侍れば
勝とす

八十六番　稲妻
左
伏見山松の木ぬれまの稲つまとなる田の苗の露をうるふ
右　勝
時雨こそ田面うるふまのかけゆるふひく秋はまたに行
たはしるるみ風情ふり右一作おろしれば勝とす

八十七番　雨中駒迎
左　持
あめふりてくるさとなるものとなれば門をまいるひのこゑ

ふるもあれるつうて引ふれはやかをとぬれちの月のこま
左右ともに面ふ情こそ勝劣なくや侍らん

八十八番　月
左
大うさいうきさりのふる大きくもすむ月申ぶハむつまし
右　勝
うゝやまおろ山せよ出ふるちりふき出るすこ淺月
左ふもるるるる侍れと右ふ一作感淺ら侍れば
勝とす

八十九番　雨夜月

左　持

ふるもれハよるくんもすむ月を書をね松の風そふよ分る

右

ものもふく風もふるねハこよひを月もんてすミ渡りられ

左右ともに詮おあ一ものやゝ作くん

九十番　月前風

左　持

ものるよの月ハくもも井よ志つまうて袖よのゝふく秋のうをの机

右

くまもふくて松をん月の志つをうれ〻くをを寸人ぬよ〻ふ

左右ともにこゝふるゝやうに一ふ作き八勝劣を知

九十一番　月前笛

左　持

拝のうちよ月もすゝむ笛ハ秋のよ志ふ和功くん

右

ふくるよ月よ笛のねゝくゝとしてすまつてねぬ人やられ

左一ふ者くいとおうし右寝ぬ人も多りてくいつれ

勝劣ふまりのふ〻し

九十二番　山月望禮

左　持

言砂ハ尾上の月やふけぬるんすミ渡りぬる禮の春うを

右

あらこと山ざくらあけぼの月新のさやぶひくくこうのもとうち
はつうひいつまでもおもしろくやはたらん

九十三番　松間月

左
うくひすへまつ松のあれまのんよりもまつそやつきのうくれそあくん

右　勝

松風の吹のうらてもミかくくん末のまよりうる月のさやけさ

左　うす松の末ぬ月のんよりハいうるまつやつそれをまつ
てうくれ初ゆんよハ月の松ぬ信よりうれらといふすう
さくに実ぬまつくくしく右ぬ勝よれ

九十四番　月前行霧

左
吳服のふ月もあくくハよ題月の新よりおくれてのやる霧くくふ

右　勝

吳服ぬしてくくおく霧のもくくぬしてひくくさやくくまくよハの月ふ
左ぬもくくあり霧ぬ信れと右ぬ風情すくくまくくを
信れハ勝よりや中信くくん

九十五番　八月十五夜月

左
くくひすくくすあくくの月うくくハくくそそ夜と人よ信くくくくまを

右　勝

[illegible]

左の月もさるべくみえれと右の月あくるまてさてさくべくみえれハ勝とやや中侍らん

九十六番　月前船

左

まちとうとうとねめの浦の沖つ門に舟人さうく見やらん

右　勝

あくるを待つ夜舟そ見やらぬいろおんしてはやらん

左　外うら島やりくるのくるそ月ののくるを出さる

さまそハ月　右　月ものの詮のくるを勝とや

中侍らん

九十七番　夕　屋

左

山のそれとよとそるそるおのあひを夕日のうへをとそる二人うた

右　勝

山夕ふるこ月のそしそれめふそとねとめくしきうれ

左　ものくるこやくるハうまてさせる風情あくや右方

くるかくるうに感も侍れハ勝とや中侍らん

九十八番　山家

左　持

山里の垣ねの芙蓉色さそて二うねあさつ秋をけぬるし

右

うちふひとへ　ゆうとの水れ山茶入うりとちん

左　右とも如月　そとくや　中ぢらん

九十九番　川　霧

左　持

いのをとゆふかさるゝ朝霧のいうあるをとろきしんとまるん

右

音羽山こねの朝日はてしをもまる霧くゝ　野の河つ

このつうひとくゆうとうさとこく勝劣あるや

百番　曉　持　衣

左　持

あうりの月ようゆをもくくあるあさのく浦う衣うつん

右

かゝ衣しもしも秋の夜を曉うけてうつやあれある

左　右とも　にうあうくしいつまおうれうとも　あるや

百一番　海邊　持　衣

左

かつうらの秋舟待うひとゆの浦れ沖つの遊鳥や衣うつん

右　勝

沖つ風ふけひの浦之波のうるくさもむく衣打あう

左　ちうとうあうさうふ待れと右ゆ紅つゝ　やま

たうらけもすゝ　うく待れ　勝ちや中ぢらん

百二番　菊露

左

しら菊の花のさかりに成にけりおくらん露のちらまくも惜ん

右　勝

むら菊の花のまかきハしら露もあらんハ色てぬきまさりける

左哥露を目おもふにハあらしておもひつるのを

又露のちらまくおしむハおのつからあらぬことにこそ

右哥菊の風情をとゝめつゝあるらんかたちなれハ勝とや

申侍らん

百三番　老對菊

左

つもりてハ老の中と菊の花の露いかに契をかけむとすらん

右　勝

老ぬれハあらしそ白くなりにける庭のしら菊衰とハみよ

左哥思のかすくしおほよそにも侍らん歟右哥ハ頼つるひ

ゆゝしうたにけれハ勝とや申侍らん

百四番　菊映水

左　持

のこりなるおり入ん梓川のさゞれにうつるしら菊の花

右

咲まかり岸のしら菊影すみて白玉しける川とみるまて

左哥風情花やかにていと興ありけれ右哥又一興

有ておもしろけれハ勝劣無きものなるへし

百五番　紅葉

左

吹ちらす山のあらし　雲をもさそふ秋やかぜ

右　勝

一ふきして宮こよ秋を吹ふせよ山のおく　おくいたるまで

左　もみぢもさそふくれなゐと右　すゑくの紅葉ひ感者く

ぬ　仕れいまさらき　勝と

百六番　尋紅葉

左

山めぐる時雨の雲よあひたちそめる　佳や有とと

右　勝

そめぐるも今ハ有やと時雨ふる紅葉そ　山めぐりすれ

非情のもみぢを對して　の雲ぬのゆふ　ねもたゆ

のゆふ　ぬ　ぬ　右　ことハ

さらにて感も仕れ　勝と

百七番　松月紅葉

左　持

山松の末に月よ見ゆる年ゝ紅葉ふの色もかゝらぬ

右

秋山のもとゝ松の末に月ハ　紅葉ふ

左　ともゝゝ　ゝ　風情

仕れ　勝劣　ゝ

百八番　名所紅葉

左

時雨ふるあきの墨もそめかねん　まだ紅葉ハ色ハ色なし

右　勝

こよなくもくれなゐの秋の山ぶかき　ふくるに花ハまさる色なれ

左　歌つよく　ふくるに花ハ　有ぬ　花の

のこりなく紅葉ぶけ深き　歌をあらし　ふれハ勝や

右

百九番　秋日

左　持

時の月ふくるをそれハ朝皇の花ハ見ぬもおくれさりけり

右

ひとしれの秋ハ日数ハ　歌をあらし　ふれ　ゆ　ふ

左　紅葉　おくれ　日数　ふ　右　ふ

ふ　ふ　風情　ふ

ふ　ふ

百十番　暮秋霜

左　持

こよなくもくれてもなほ　月のあるあけの月ハ霜やおくらん

右

見しら花の色ぶけるもはるへく霜ぶくまでもあれる秋哉

いつまでも感あるて勝方をものあるへし